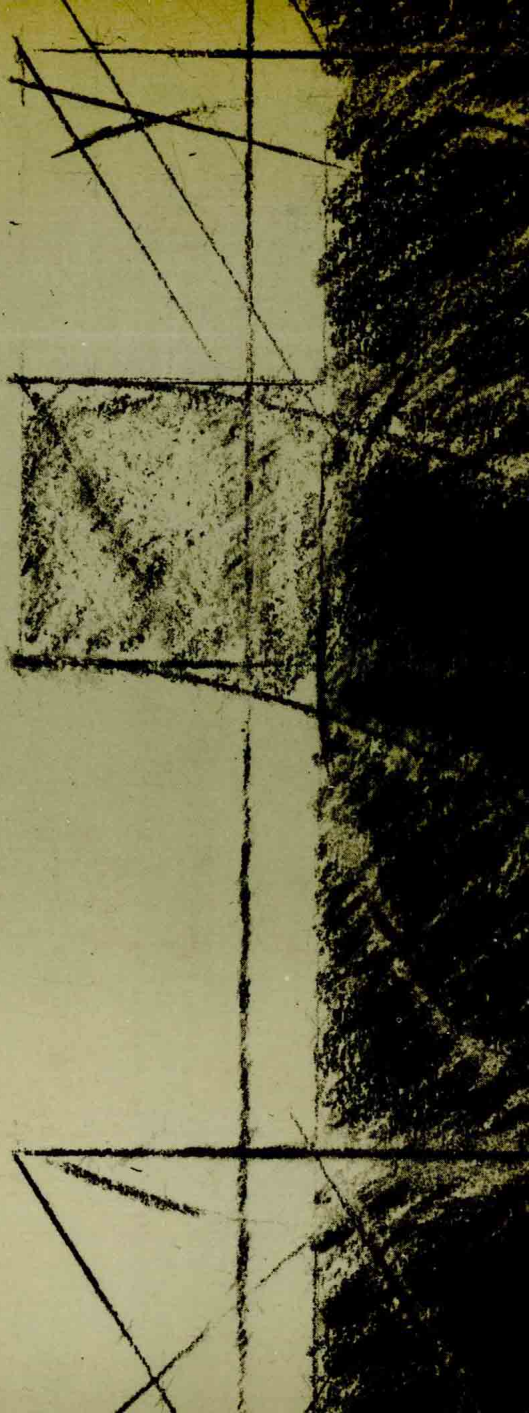


渡辺京二
地方という鏡



葦書房

地方という鏡

渡辺京二

葦書房

著者略歴

1930年京都市に生まれる。著書に『熊本県人』（新人物往来社）『小さきものの死』（葦書房）『評伝宮崎滔天』（大和書房）『神風連とその時代』（葦書房）『北一輝』（朝日新聞社）『日本コムニオン主義の系譜』（葦書房）

住所 熊本市新大江3丁目10-5

地方という鏡

昭和五十五年十一月三十日初版印刷
昭和五十五年十二月十月初版発行

定価 一八〇〇円

著者 渡辺 京二

発行者 久本 三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂一丁目三番十五号
電話 福岡〇九二(七六一)二八九五

振替福岡三九四三〇

印刷所 正光印刷株式会社

製本所 大進堂

© 1980 Kyoji Watanabe

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0091-8016-0135

地方という鏡
目次

* 1976

7

1 批評の存在理由 8

2 労役としての批評 12

3 言葉への感受性 16

4 素人小説の潮流 20

5 体験の秘匿と表出 24

6 現代への違和と望郷 28

7 職人芸の根拠 32

8 甘やかされた詩人たち 36

9 詩誌『叙情』のつよい充足 40

* 1977

45

1 石牟礼道子と海浜民 46

2	何が文学なのか	50
3	文学的根拠としての質感	54
4	前山光則の故郷	58
5	「生きたい」と「書きたい」	63
6	水底から悲歌が聞える	67
7	「児戯」に執す	71
8	もうひとつのヘアジヤ	75
9	中流家庭と鬼婆	79
10	作家的成功と野垂れ死	83
11	日曜作家の実在感	87
* 1978		
1	統覚の回復をめざして	94
2	お隣りのぞきの楽しみ	98

3 内なる痛烈な死 103

4 民俗学的試論とフィクション 107

5 『中野重治論』の水準 111

6 事物との遭遇 115

7 歴史と詩の総合 119

8 画描きと権力 124

9 感性への誠実 128

10 井上岩夫の出現 132

11 ある少女の自死 137

12 時代の痛みを背負わぬ美 142

* 1979

1 夢としてのストライキ小説 148

2 戦後社会と生活人文学 153

3 ベルリオーズと腐魚の匂い 158

4 戦後の生活理念の破産 162

5 同時代の声がほしい 167

6 世界は広い 171

7 戦前・戦後を貫通する止揚の視座 176

8 女の性と自然 181

9 土俗的聖俗空間の発掘 185

10 もの言わぬ子の深い世界 189

11 歴史小説の陥穽 193

12 生理がとらえた時代の水圧 197

* 1980

1 遊行する民の存在感覚 202

2 生命のリズムとしての文章 206

3 文学における素樸とは 210

4 吉田優子の玲瓏たる世界 214

5 バカ談義と芸術家 218

6 幕切れの弁 222

地方という鏡

あとがき 261

索引―著者・作品 i

掲載雑誌発行所住所一覧 vi

***1
9
7
6***

1 批評の存在理由

田中艸太郎氏のあとをうけてこの月評を担当することになった今、正直なところ私はまだまどいどの気分を抜け切っていない。

私はいまだかつて、いわゆる文芸同人誌に所属したことがなく、地方の文壇・文化界とは何のかかわりももったことのない人間である。他人が出している同人誌を読む習慣などまるでなかったし、ましてやそれを批評しようなどという大それた魂胆を抱いたことはなかった。こんどはじめて大量の同人誌や地方文化雑誌を通観してみても、自分がひどく異質な世界にさまよいこんでいるような気持ちを抑えることができない。

詩や小説が好きで、自分も書いてみずにはおれなくなった人間がいるとする。自己表現は、他者によって読まれてはじめて完結するのだから、活字にしないわけにはいかない。商業誌に投稿したり、文学賞に応募したりするほどの野心があるわけではなく、ただただ、自分のなぐさめのためである。独力では活字にならぬとあって、同気あい寄って雑誌を出すことになる。

そういうつましい、あえていえば原初的な制作者たちを仮定したとき、「批評」とは彼らに

1 批評の存在理由

とって一体何なのだろうか。それはいらぬせつかいであり、まかりまちがえば、人間の最もデリケートな領域に対する無礼きわる侵犯ではないだろうか。

批評は才能を育てるはずだというのは、まだ証明されていない独断である。私の大好きなフォークナーは、作家に必要なのはほめ言葉だけだと称して、一切批評を読まぬ主義だった。だがそのフォークナーも、批評は無視することができても、黙殺に耐えきけることはむずかしかったはずだ。作者にとって何よりつらいのは、自作に反響がまったく返って来ないことだという。黙殺されるより悪評されるほうがまだ、という心理は、もの書きの通弊であるらしい。「同人誌評」という月評の形式が維持されているのは、そういう作者たちの要求によるところが大きいものと思われる。

だからそこではできるだけ多くの作品に触れることが要求されるのだし、また下手な理屈をこねるより、丁寧な技術批評がよるこばれる。自分の作品に足りないものがあるとすれば、それは技術だ、というのが一般に同人誌作家を支配している盲信だからである。したがって同人誌評は一種の出来ばえ批評であるのがふつうであり、そのような「講評」が作者側から受けいられるためには、担当者はそれなりの声価を有する「批評家」でなければならぬ。

ところが、私がそのような「批評家」でないことは天下周知の事実といってよい。私に「講評」をくだす資格がないのはもちろんであるが、その気もまたないことだけは、ここではつきりとことうっておきたい。そういう私が、この欄の担当をひき受けるのは、講評的な出来ばえ批評（技術批評）以外に、批評というものの独立した存在理由について、いくらか信じるころがあるか

らである。

私は先に、批評が才能を育てるという盲信への疑念を表明しておいた。事実、批評が直接に作者を益するかどうかきわめて疑わしい。だが才能が、ある風土を母胎にしてのみ育ち、その風土を構成するたしかな部分として、文明が存在するのだとしたら、そしてその文明のひとつの核として、知的ないし感性的な伝統があるのだとしたら、批評はその伝統に働きかけ、ある知的水準をつくりだすことにおいて、やはり才能の形成に参与しているのである。

つまり批評の存在理由は、ある知的ないし感性的な持続を、風土としてつくりだすことにある。批評はそういうまわり道を通して、ようやく作者とつながりうるような迂遠な仕事なのだ。

手許の同人誌をめぐって感じていたことはいくつかあり、それはこれからおいおい触れていくことになるのだろうけれど、ひとつ鮮明な印象として残るのは、たとえば小説に構築的・造形的な作風がまったく存在しないということである。達者に書き流し、どれだけでも長く書けるという作風が目につく。これはつまり九州の文学的風土ということであって、前任者の田中氏もこういう風土に対して、戦後文学的な理念を導入することで氏なりの挑戦を試みておられたと思う。私にそれほどの文学的抱負があるわけではないが、創造の土壌を問題にするという田中氏の姿勢は、この欄の伝統として私もひき継いで行くことになるだろう。

なお私は、対象を小説・詩・文芸評論といった、せまい「文学」にかぎらず、あらゆる散文はつまるところ作品であるという立場をとりたい。したがってふつう文芸批評の対象とならぬような論文や記録のたぐいも、とりあげるつもりである。また西日本在住作家のいわゆる中央ジャー

1 批評の存在理由

ナリズムの上での仕事も、必要に応じてとりあげて行きたい。同人誌というにかぎらぬひとつの地方的な芸術空間ないし知的空間をつくりだすことが、とくに必要だと考えるからである。

2 労役としての批評

今月は批評について書く。送られてくる雑誌に目を通すさいに、つい批評的散文に氣をとられるのは、私自身がそういう種類の文章を書く人間だからだろうが、端的にいつて、やはり批評は、ひとつの文学雑誌、ひとつの文学グループの意識と芸の水準を示す指標なのだ。

もちろん、地方雑誌における批評の不振というのは、こういう欄のきまり文句みたいなものであって、そういう型どおりの嘆息をいまさら繰り返されては、読むほうもいい迷惑というものである。ただ私は、手許の雑誌にのっている批評らしき文章を通観して、救いたい依然たる旧態と、それとはまったく異質な新風との対照に、いささか感慨なきをえなかっただけのことである。旧態についていうならば、伝統的な同人誌・文化誌における批評の実態は、聞きしにまさるものである。文学教科書風の概念の愚にもつかぬ受け売りに、自分の文壇人とのつきあい話をまぜあわせれば批評になると信じているのではないか、といったたぐいの雑言が思わず口について出そうになるが、とにかくタンカひとつきれないで何が批評だろうか。

もっと口が回るようになってから批評を書いてくれ、といいたい文章が多い。つまり彼ら

は批評というものをナメているのだ。なぜなら、小説のほうを見れば口が回りすぎる作者が結構いるからで、表芸の小説ではさすがにみつともない真似はできないが、批評はお遊びだからいくらでも旦那芸を披露してかまわない、といった通念が、同人誌仲間では支配しているらしい。

しかしいっぽうでは、こういう旦那芸的な世界とはまったく切れた、切実な批評意識が育って来ていることを、私は何人かの書き手のなかに確認することができた。たとえば『泥質』第十四号（久留米市）の今村和実氏である。

今村氏の『ナルシズム論』は、けっして出来のよい評論ではない。だが明らかなのは、彼が批評を自分の切実な必要として書いていることである。もともと批評とは、作品の品評でもなければ文学的教養のひけらかしでもない。それは情況という霧をとおして自分の生きる空間を切開しようとする労役である。今村氏には、そういう情況をかみくだく労役としての批評の感覚がたしかに定着していて、そのことは、肉体的トレーニングに熱中する友人という身近な対象から、全情況の意味を問うてゆくという彼の方法のなかにはっきり表れている。

だが、彼の作業は後半むざんにくずおれていく。それは彼が『生活』をそのまま価値と信じるような安易な視点にもたれかかっているからで、そのため彼のナルシズム批判は、社会とか民衆とかの物神化された観念を一步も超えぬものになってしまっている。

こういう物神化された民衆という観念は、今月読んだいくつかの魯迅論にもあふれかえっていた。今日の中国で、ひとつの規範と化しているような魯迅像をどんなに声高にうたいあげようと、それが批評であってたまるものか。こういう呪縛された意識からは、ほかに何が出てこようと、

批評だけは出てきようがない道理だ。ただ今村氏は、情況に対する切実な皮膚感覚を失うまいとする一点で、かろうじてこういう筆者たちと自己を区別できているのである。

今村氏に表れているような新世代の批評意識を、一個の批評的作品としてみごとに定着させているのは、尾木信芳氏と清住朱実氏である（『暗河』一一号）。

尾木氏の『野坂昭如小論』は、助詞を極度に省略する野坂の文体を分析することによって、野坂の作品世界が、戦争体験を「自己のものとして引き受け、自己の世界として再構成するという方法を放棄」したところでありたっていることを明らかにする。そしてそれはたんなる断罪ではなく、同時にそういう方法によってのみもたらされた「墨絵のような」原初の風景に対する愛惜によって裏づけられている。すでに完成した批評と違っていいが、私が注目するのは、この巧みな手法のかげに、批評をつねに自分の生活経験にまでひきもどそうとする、筆者の執念が見えかくれていることである。

おなじことは清住氏の『「死の棘」論』についてもいえる。論旨が紹介できないのは残念だが、この人の論理的抽象力はしたかなものであって、文章も実によく回転する。その批評家の将来は注目してよい。尾木・清住とならべれば、私たちは情況という怪物との格闘に強いられて、ひとつの新しい批評的言語が生まれつつあることを知る。すなわちこれは、今日の西日本の批評的前線である。

このような批評的言語の開拓者は、いうまでもなく吉本隆明である。尾木氏や清住氏もそうであるが『ゼロ』（福岡）というリトウル・マガジンには吉本氏の影響がとくに目立つ。ただその